僕の親友は獣医さん

侍bobo

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕の親友は獣医さん

【Ｎコード】

Ｎ０９６８ＢＡ

【作者名】

侍ｂｏｂｏ

【あらすじ】

平凡な男性が平凡に休日を過ごそうと、日帰りで故郷に戻ることにした。以前と変わらない街のなかで、高校時代の友人に出会う・・・

（前書き）

どうも、侍（サムライボボ）ｂｏｂｏといいます。
初投稿ですので、日本語がおかしかったり、何が言いたいか伝わらないこともあるでしょう。たとえミスの塊でも温かい目で読んでいただければありがたいです。

寒い朝だ。
いつものようにトーストにジャムを塗るだけの朝食
今日は仕事もなく、これといってやることもない。今日一日は暇なわけだ
「たまには一日中歩き回るのもいいかな・・・」
不意にそんなことを思いつく。運動不足にもなってるだろうからいいだろう。うん、そうしよう。
行く当てはない。見知らぬ街を散策する気分でもない。
だったら知ってる街を散策しよう
早速旅自宅を整えた。といっても、私服に財布や携帯などの必要最低限しか準備しない。日帰りだし。
　電車に乗って、乗り換えて・・・
着いた場所は今でも覚えてる。我が故郷だ。田舎でも都会でもない、微妙な感じはまだ残ってる。
自分が子どもの時、家族でアパートに住んでいた。まあ立ち退きで今は無いんだ、そのアパート。
アパートだったその土地は今はでっかいマンションの一部になっちまってな
両親は今は祖母の家に住んでる。兄弟はもう立派な社会人。
自分は普通に生きてる。夢はないこともなかった。でも諦めた。今後叶える予定もない。今の生活に満足してるつもりだから。

さて、昼はよく行ってたイタリアンレストランがまだ残っていたのでそこでとることにした。
高校時代とほとんど変わってなくて驚いた反面、安心した。
気前のいいおばちゃんのいる駄菓子屋とか、親父と仲のいいおっちゃんのラーメン屋とか

あとショッピングモールもよく行ったな～
やはり落ち着くための場所は必要だね

満腹感に満たされた後、引き続き懐かしき街を散策した
そうだ・・・ここら辺は確か・・・
そこは住宅が密集する中、穴埋めをするかのように作られた公園・・・といっても遊具はすべり台くらいで、あとは大きめの木が生えてるだけだ
そう、あのちょっと斜めに延びてる幹が・・・
　その印象的な木の前に誰か立っているのが分かった
「そこのアナタ、もしかしてもしかすると―――」
「ん？なんです？」
白衣を着た男性が振り返る
「やっぱりそうだ！ドクター！」
白衣を着た男性・・・ドクターは驚いた表情で
「あ・・・！久しいなぁ！ヘイボー！」
「まだその呼び名を覚えていたのか」
「そっちだってまだドクターだなんて言ってさ」
懐かしい感じだ・・・こいつは高校時代の友人、あだ名はドクター・ズー。ドクターって短縮して呼ぶ
「この木、覚えてるかい？」
「もちろん！鳥の巣があったよね～、観察するにはもってこいだった」
「なんだ、まだ動物を可愛がってたりするのか？」
「そりゃそうさ～」
こいつのあだ名の由来、それは動物をこよなく愛し、動物の体調を見極め対応するなど、とにかく動物大好き医療系アニマルオタクな性格からつけられた。・・・いや、そう呼んでいるのは自分だけだが。
ちなみに自分のあだ名の由来はいたってシンプル。『平凡な坊や』

を楽にすばやく正確にの三原則で変形されたのが『ヘイボー』だ。
馴染みやすかったのか、数日にしてクラス中でそのあだ名が定着した。他にも『ＨＥＹ！ＢＯＹ！』とか『閉房』などがあるが、どうでもいいな
「ドクター、一体何故ここに？」
「それはこっちも聞きたい。ヘイボー、何で君が？」
「ここは生まれ育った故郷なんだ。実家は無いけど。暇だから散策でもと」
「そうだったのか～、僕はこの近くの動物病院で獣医をやってるんだ」
「獣医！そうか、獣医か！その性格も生かされる職に就けたか！あだ名も伊達じゃないな！」
「まあ、小さい動物病院だけど。それにしても本当になれるとは思ってなかったよ、これも君のおかげかもね」
「へ？なんかしたっけ？」
心当たりは特に無い。うーむ・・・
「僕ってさ・・・周りから変に思われてただろ？」
！！
・・・そう、彼は世間から不審に思われていたんだ。
まず、そこら中の動物にもやたらと可愛がる人だった。野良猫ならまだしも、ネズミやらカラスやらにもだ。そして周りにいる人に豆知識を説明する。話の腰を折っているとも気付かずに。
それと、彼は動物を持ち帰るという噂を聞いた。
クラスメイトの話によると、家には注射器や薬品が大量に保管されていたとのこと。
近所にその情報は簡単に広まった。それからだ・・・彼がクラス・・・いや、地域で浮いた存在となったのは。
自分は決心した。アイツが何をしているのか探ることにした。
クラスメイトから話を聞いたり、地図で家を確認したり、本人に会って会話の中から情報を採取したりもした。

そして寒い季節になってから・・・・
持ち帰りの件。お持ち帰りはどうかと思い、アイツの下校の後を着けた。
噂によると、お気に入りの動物を家へ連れ込むとか。
アイツは仔猫を抱いていた。・・・うらやましいとか思ってない、思ってないぞ・・・
よく見るとその猫は気力が無さそうに見える
彼は仔猫を家に・・・・ではなく、家の裏の路地へ連れて行った。
彼は一旦家へ戻り、蒸しタオルで仔猫を包んだ。次にミルクを飲ませた。動物用哺乳瓶でね
その状況を見たとき、自分はこれだけを思った。
〔あいつは変じゃない、とっても優しいやつだ〕
それからだ、あいつと話をしたり、遊ぶ時間が明らかに多くなった。
世間に知らしめたかった。ここまで動物のために動く高校生がここに居るんだって。今度は友達同士がよくする、普通の雑談、それに、動物の豆知識。動物向けの医療の話も聞いた。

「知っていたんだね、あの噂」
「そりゃそうさ、地域中に広まってたもん」
ドクターは続ける
「みんなが僕の素顔を知っていく度に関わる人が減っていって・・・
でも、両親だけはそばにいてくれた。」
「そうだ・・・ドクターの祖父は獣医だったんだよな・・・話してくれたっけ」
彼の家にあった器材は祖父が使用していたものだったのだ。
「そう、父さんも母さんも、じいちゃんが好きだったから」
「両親は動物を愛し、守ってやれる自慢な息子が可愛かったんだろうな」
「でも、家族だけじゃなかった。僕を受け入れてくれたのは」
「優しい家族がいてよかったじゃないか～・・・ん？家族以外に？」

「君がいなかったら、他人を信じることができなくなっていたかもしれないんだ。感謝してるよ」
「そりゃ、どういたしましてだな」
そんなことを言われるのは慣れていないからか、どうも落ち着かない
「・・・っと・・・そろそろ行かないと・・・流石に昼食に行っきますから時間がかかり過ぎてるからね」
「獣医さんが公園でサボってましたなんてな」
自然と笑顔になる
「じゃあね、たまには連絡するよ、僕の大切な親友だからね」
「ああ、またな」
彼の姿が住宅の陰に消えるまで彼の背中を見つめ続けた。
気付けばあたりは夕焼け空に染まっていた。
・・・帰ろうか

家に着くと旅の疲れが足にきた。しかしそれは気にならなかった。
―――まさか自分が感謝されていたとはな
今まで普通に過ごしてきたつもりだった。
普通の大学行って、普通に金稼いで、たまに欲を満たして・・・
自分の好きなように生きることが普通だと思って・・・
あいつも同じなんだ・・・
でも、あいつはあいつのしたいようにして、なりたいようになって・・・
輝いてるよ、あいつ・・・・・
自分はなんなんだろうな・・・

自分のパソコンを起動させた。いつもはもう夕食は済み、入浴の時間だが、今日はそんなもの、どうでもよく感じた。
キーボードを叩き、作業をすすめる
就寝時間でもお構いなし。明日の仕事に響く？関係ない。ずっとこ

のままでもいい
すこしずつでもいいよな、ちょっとだけでもいいよな、不得意でも関係ないよな、好きでも嫌いでもどっちでもいいよな、年齢なんて関係ないよな・・・！
今からでもいい、自分のやりたいことで輝きたい・・・！

ドクター、感謝するよ。君のおかげで僕の人生を変えられるかもしれない
いや、すくなくとも、毎日が楽しくなるよ

7年前を思い出す・・・

ドクター、きみは僕よりずっとすごい、そんなきみに追いついて、また一緒に心から笑いあおう

その時こそ僕らはなれるんだ・・・

親友に

（後書き）

初投稿にも関わらず大量な文字を打ち込んでしまいました。短編であるにも関わらず申し訳ないですｗ
さて、書こうと思ったきっかけは思い立ちです。無性にやってみたくなったんですよ、小説。
今回は試しに書いたものでしたが、精一杯書きました。
読んでいただきありがとうございました。侍ｂｏｂｏでした。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0968ba/

僕の親友は獣医さん

2012年1月2日04時51分発行